1986

学校教育研究

1

新しい学校教育への道

日本学校教育学会 編

東信堂

BULLETIN
OF
JAPANESE ASSOCIATION
OF
SCHOOL EDUCATION

定価2500円

3037-000013-5111

学校組織・教育課程・教育方法研究の視座③

2

授業の完全理論への道

吉田　章宏
（東京大学教授）

はじめに

「授業の完全理論は完成しえない」。

言いかえれば、実証的――経験的――で、実践的な授業理論は、本質的に、常に未完成であるという性格をもつ。

以上が、本稿の結論である。

本稿は、この結論に到達するまでの議論の筋道を全面的に展開し論証するというよりは、その主要な論点を素描し、指摘する、という性格のものである。

「授業の完全理論は完成しえない」という否定的な結論は、授業の完全理論が完成する日を夢見て日夜努力しつつある実践者あるいは研究者にとって、いかなる意味を持つであろうか。また、「完成させる」ための道は果たして存在するであろうか。

仮に、「完成しない」ことを承認した時、授業理論形成の道は一体いかなる理論を目標として追究さるべきであるか。

以上についても触れることとしたい。

一　ひとつの夢

私はひとつの夢を見た。時は、二一世紀、それも二〇世紀末のあの陰鬱な時代が人々の記憶から薄れる程、時を経た年のある日のことである。

それは、教育科学も大変な進歩を遂げ、科学的学問としての地位も確立し、ノーベル賞に教育科学部門が設けられたとのニュースが伝えられた直後のこと、将来はそのノーベル賞の有力候補の一人かと目されている若く優秀な教育科学者であるX氏の訪問を、私は受けることになった。

X氏は、私がかつて授業研究に携わっていたことを聞き知って居て、氏が最近完成した「授業のX理論」――「授業の完全理論」と呼ばれているそうだ――について、私に話をしたいということだった。老人である私はもとより時間は十分あることであるし、氏のような世界の教育科学の将来を担う若く優れた学者の訪問を受けることを名誉なこととも思い、

喜びをもって、お迎えしたのだった。

初対面の社交的なあいさつのあと、氏は、早速本題に入っていった。

「私の完成しました授業理論Xは、授業実践に関する理論としては、画期的なものです。『授業の完全理論』とも呼ぶべきものなのです。」額が広く、大きな鋭く澄んだ目をした、いかにも知性的な容貌の持ち主であるX氏は、自信に満ちた面持ちで、こう切り出した。

私は、「授業の完全理論」という言葉は聞いていたものの、その内容については、全く無知であった。創始者のX氏から直接その話を聞くことに、知的な興奮を覚えていた。

「この理論が完全理論と呼ばれる主な理由は二つあります。一つは、この理論の持つ実証性――経験性――であり、もう一つは、その実践性であります。授業実践理論研究の歴史に学ぶことによって、総ての実践者と研究者を満足させる理論の特質を求めた結果、この二つの特質がそれであるということが分かったのです。これまで、実践家は実践性を求め、研究者は実証性を求めてきました。しかし、理論がこの両者を満たすことは極めて困難でした。X理論はこの困難な課題を解決したのです。」とX氏。

「その実証性――経験性――というのは、具体的にはどういうことですか？」私はつい待ち切れずに、こうたずねていた。

「それは、詳しくお話すれば長くなりますので、簡単に申しますと、この理論がこれまで記録に残されている総ての授業の総ての資料を分析し、まとめられた理論だということです。」

「総ての？」

「ええ。総てのです。全世界にある総ての授業記録――それは、いわゆる主観的に、記述的に記録されたもの、逐語的に文字化されたもの、テープにとってあるもの、VTRに記録されてあるもの、などの総てを含むのですが、――その総てが、最も新しい型の超大型コンピューターによる自動翻訳装置で翻訳され、それが自動分析装置にかけられ、分析された結果が、この理論の資料となっているのです。こうした仕事は、二〇世紀末の段階ではまだ不可能だったのですが、最近の研究技術の急速な進歩で初めて可能となったのです。」

私は、「全世界の総ての授業」ということばの重みに圧倒されつつ、何か物足らなさをぼんやり感じ始めてもいた。「分析といっても、多様な視点、――たとえば、教師、子ども、研究者の視点など――があるし、また、分析方法にしても、いろいろな視点に基づく多様な分析方法があるのではありませんか？」と月並な質問を私がすると、彼から直ちに、次のような答えが返ってきた。

「ええ、その通りです。しかし、このX理論は、授業実践の経験に基づいた理論化の、考えられる限りの視点と方法の総てを駆使して、授業の法則を抽出しているのです。ついでに申しますと、資料から抽出された授業の法則の数々を理論へと総合する方法、――つまりまとめ方ですね、――それも、既存の方法の総てを組織的に網羅して採用しています。」

「なるほど。」私は、超大型コンピューターにより、想像もつかないような膨大な作業が、考えられないような速さと精密さで、組織的、多面的に、深く分析されているらしいことだけは、感じ取ることができたように思った。

「では、X理論の実践性とは、どういうことですか?」

「ええ、それはですね、簡単にいえば、このX理論を、ある教師が学ぶと、その教師の授業実践の質が、飛躍的に向上する、という意味なのです。教師によるX理論の学習は、昔流に書物によるだけでなく、コンピューターにより統合された最新のマルチ・メディヤによってもできるようになっています。」

「それは素晴しい。」私は思わずうなった。教師が授業実践の場から排除され、CAIにとってかわられてしまうのではない。X理論は優れた授業を実践できる人間教師を育てる力を持っている。教師には、その極めて能率的で効果的な習得が保証されている。そして、習得後の教師の授業実践の質は飛躍的に上昇するというのである。私は感心するばかりだった。これこそ、若いころ私が夢に描いた授業理論ではなかったか、そうも思った。この理論は、単に学問的、科学的、実証的、経験的であるというばかりでなく、極めて実践的であるというのである。これなら、「思弁的」であるとか「非科学的」であるとか、あるいは、「非実践的」だとか非難されるはずもない。実証性・実践性の極致にある理論である。まさしく、授業の完全理論だ。そこで、私はおそるおそる、たずねた。

「老人である私にも、あなたの理論を本で読むことはできるでしょうか?」

「ええ、実は今日お持ちしましたこの本にX理論のエッセンスがまとめられています。お読みいただき、ご感想をお聞かせいただきたいのですが」と彼は、分厚な一冊の書物を差し出した。著者はX氏で、「X理論――授業の完全理論」と題されている。私は、感動にふるえながら、その本を手にとった。

「ところで」私は不勉強を恥じながら、「この理論は、現在既に世間一般に広く知られているのでしょうか?」とたずねた。

「いいえ、それはまだなのです。なにしろ、理論が不完全な段階で不完全なまま公表して、社会に混乱を引き起こしてはならないので、最近やっと完成するまで、極秘の内にコンピューターによるデータ処理と理論生成をしてきたのです。もちろん、理論の実践性の検証のために相当数の教師に習得させることはしました。それはそれは絶大な効果を収めました。しかし、それらの教師以外には、また何処のだれにも伝えられていません。いわば、『秘伝』の状態に保たれています。」

「では、X理論の普及はこれからということですね。」

「はい、いまこの本は、とりあえず数千万部を印刷中で、全世界の教師のために各国語で、一斉に発売の予定になっています。何しろ、長年渇望されていた完全理論です。たちまち全世界の教師達の間に急速に普及することは必至ですので。」

私はそのように優れたX理論が、全世界の教師の授業に役立つ日を思い、X氏の研究に、若き日の私の夢が実現されたことの喜びに浸っていた。……

突然のけたたましい音。目覚まし時計の音。夢から私は目覚めた。

目覚めてから、たとえたった一ページでもよかった、X理論の中身にどんなことが書かれていたか見ておきたかった、と悔んだが、後の祭り。総ては既に夢と共に消え去っていた。

二　「授業の完全理論」の「実証性」と「実践性」

私の夢に現れた著作「X理論――授業の完全理論」は、かつて、武田常夫氏が書いた「この通りやりさえすればきっとうまくいくといった授業の骨法を知らしめるコーランのような書物」であり、「何万円出してもいい」（武田常夫『真の授業者をめざして』国土社、一九七一年、八二頁）便利な書物かも知れない、とも思われる。

具体的な内容が全く不明なので、何とも言えないが、この理論の完全性の二つの特質、「実証性」と「実践性」の内、前者は教育科学研究の側から、後者は教育実践の側から、それぞれ強く望まれている特質である。その両者を兼備しているX理論は、確かに、完全理論と呼ばれるにふさわしい理論である、と思われた。また、そのように優れているX理論が、教育界に普及した時、教育実践はどうなるのか、理論と実践のかかわりを考える上でも、是非知りたいものだ、と思った。

授業理論の形成をめざして研究している実践的研究者あるいは研究的実践者にとって、上記の二つの特質を持つ「X理論」は研究の目標となるはずのものだ、とも思われる。目標が明確にあることは、研究の仕事にとって極めて大事なことであり、その意味でも、「X理論」の夢は貴重であった、とも

思われた。

しかし、しばらくすると、妙なことが気になり始めた。夢の中のX氏のいった意味での、「完全な実証性」と「完全な実践性」とは、果たして両立しうるのだろうかと、不安になりだしたのである。

「X理論」の具体的内容が不明であることはそれにしても何ともどかしい。しかし、逆に、内容が全く不明であっても成り立つ議論があるならば、その議論はかえってそれだけ普遍性、一般性を持つことにもなるであろう。というわけで、「X理論」の内容にかかわらず成立する一つの問題を以下に提示し、検討することとしたいと思う。

それは、簡単に述べれば、次の問題である。

「X理論」は、完全な実証性と完全な実践性とを兼備している「完全理論」だとのことである。では、X氏による「X理論」は、一たん成立したのちは、以後永遠に「完全理論」であり続けることができるであろうか？

それは、できないのではないか。つまり、「完全理論」は実は、直ぐに「完全理論」ではなくなってしまう性格を本質的にもっており、したがって、実は、「完全理論は成立しえない」と言わなくてはならないのではないか。これが問題である。

そこで、まず、X理論が広く普及し、その影響で授業実践の質が飛躍的に向上した時点をとらえ、その状況を考えてみることにしよう。

そこでは、確かに、授業実践の飛躍的向上の事実に理論の完全な実践性が発現しているのを見ることができる。ところで、その時点で見られる質の向上した授業実践の数々は、「X理論」の形成に当たって生かされたことがあるであろうか。いや、それらの実践は、「X理論」成立以後の実践であるからして、「X理論」の形成にそれらが生かされたことがあるはずはないのである。したがって、その時点では既に、「X理論」はもはや「総ての実践」の資料に基づくという「完全な実証性」は主張しえなくなっているのではないか。せいぜい、「かつて完全な実証性を持っていた」理論に過ぎなくなってしまっているのではないか。

「いや」と、「X理論」の完全性を弁護する論者はいうであろう。X理論は、確かに、「X理論」以後の授業実践をその資料としてはいない。が、それは時間的に不可能なことであり、最初から明らかなこと、当然のことである。しかし、「X理論」が資料としたX以前――以下では、「『X理論』以前」をこう略記する、「以後」についても同様――の膨大な実践のなかには、X以後のどの実践に対してもそれと類似ないしは同等の実践が含まれている。したがって、実質的には、「X理論」の「完全な実証性」は維持され続けるのである、と。

この議論は自然科学理論の場合には、成り立ちうるかも知

れない。自然科学においては、理論の前後で、自然の見方は変わっても、自然そのものは変わらないとも考えられるからである。もちろん、この考えにたいする反論（たとえば、ラマニシャイン、田中一彦訳『科学からメタファーへ』誠信書房、一九八三年などを参照）もありうるが……。

しかし、人間科学における理論である授業理論にかんしては、明らかに上の議論は成り立たない。なぜか。仮に、X以後のどの実践に対しても、それぞれ、それと極めて類似した、ないしは、同等な実践がX以前にも存在したとしてみよう。それでも、それらの実践の間には、本質的な差異があるからである。すなわち、それはX以後の実践が「X理論」による実践でありうるのに対し、X以前の実践は「X理論」による実践では決してありえないからである。言いかえれば、X以前には、X理論を習得した教師による実践は存在しえないからして、「X理論」の実証性は、「X理論」を習得していない教師による実践のみに限定された実証性でしかありえないのである。

「いや」と、「X理論」の完全性を弁護する論者はX理論の完全な実証性を主張しようとするあまり、さらに言うかもしれない。「X以前とX以後の実践の差異はそれほど大きくはないのだ。」と。

それは、しかし、直ちに、「X理論」の完全な実践性――すなわち、「X理論」の習得による授業実践の質の飛躍的向上という完全な実践性――を否定することになってしまう。

こうして、完全な実践性を主張するかぎり、完全な実証性は主張し難い、ということになりはしないか。

「いや」と、「X理論」の完全性を弁護する論者はさらにまた言うかもしれない。X理論の実践性は、X以前には存在しなかったような新種の実践を創り出すことにあったのではなく、X以前に既に存在していた実践のうちで最も優れた種類の実践に向けて、その他の多くの種類の劣った実践を限りなく近づけるという意味で、「飛躍的な質の向上」をもたらす実践性だったのだ、と。それゆえ、X理論の完全な実践性の主張は、その完全な実証性の主張と少しも、矛盾も対立もしないのだ、と。

これは、実践性の主張としては、比較的控えめな限定された主張である。しかし、この実践性の主張は、X理論の普及に伴い、その力を次第に失っていくはずである。なぜなら、X理論が普及すればするほど、もしその実践性が完全であれば、「多くの種類の劣った実践」の数は減少するはずであり、したがって、その極限ではついには、X理論の実践性が発揮されうる実践は存在しなくなるはずだからである。つまり、この限定された意味の実践性は、「劣った実践」の存在によってのみ保証されていることになる。

では、X理論の実践性を維持するために「劣った実践」を

確保する措置をとったらどうか。そのためには、理論の普及を制限するのも、そうした措置のひとつである。この問題は後に理論の「秘伝化」の問題として考えることとしよう。

そこでまず、完全理論が広範に普及するとどうなるかを考えよう。

三　「完全理論」普及の諸帰結

「完全理論X」の普及については、つぎのことを前提としてよいであろう。

第一に、何か特別の措置を講じない限り、「X理論」は次第に普及し、ついには、教師達にとって、周知の理論となる段階が必ず来るということである。第二に、理論の創造は、そうした普及の事態をめざしてなされたはずであった。したがって、普及そのものは、そのめざされた事態として、望ましい事態であるはずだということである。

では、この望まれていた普及の事実の持つ意味、その帰結は何か？　X理論の完全性とのかかわりに限定して考えよう。

すると、その状況では、X理論は教師達にとって周知となり自明となっているわけだから、X以前にいたようなX理論に無知な教師達は存在せず、したがって、X理論によって、その質を飛躍的に向上させる可能性を持った実践もまたほとんど存在しない事態が到来していることになる。いいかえれば、X理論の実践性は、実は、X理論普及以前においてのみ顕著でありうるのであって、X以後、殊にその広範な普及以後は急激に減少することになる。X理論の実践性はX理論への無知の存在によってのみ支えられているのである、と言えるのではないか。

「いや」と、「X理論」の弁護者はさらにまた言うであろう。たとえ、その段階で、X理論によって、直接に質を飛躍的に向上させる実践はもはや存在しなくなったとしても、既に質の向上した実践の質の維持を可能にしているのがX理論であるとすれば、やはりX理論の実践性は主張しうるのである、と。いいかえれば、もし、X理論が全く存在しなかったとすれば、容易にその質を低下させてしまうような多数の実践の質を高い水準に維持しているのが、X理論である限り、たとえ、X理論によって直ちに質を向上させる実践が全く存在しなくなったとしても、X理論はやはり実践的だといえるのである、と。しかし、このことは、X理論普及の状況下で、更に多くの授業に新たな質の向上をもたらすことのできる理論はもはやX理論ではないということを意味する。ということは、X理論は前述の意味での「完全な実践性」を備えた完全理論であり続けることはできないことを意味する。つまり、完全理論としては、X理論に代わる別の完全理論の出現、あるいはX理論を完全にする変化――修正、改良、変革など――

が求められることを意味する。いずれにせよ、X理論の完全性は永遠ではなかったことになる。しかも、注目すべきことは、その完全性の喪失が、X理論の広範な普及そのものによってもたらされるということである。

もうひとつ問題が起こってくる。それは、X理論の広範な普及の状況において起こる変化は、決して教師にのみ限定されるわけではないということである。X理論の普及に伴い、理論の周知化という変化が次第に授業を実践する教師だけではなく、授業を受ける子ども、更には父母にも及んで行くことは避けられないからである。

この変化は、ひとつは、X理論に基づく実践を子どもが体験するなかで、子ども自身の変化として起こってくる場合が考えられる。たとえば、教師がもし同種の着眼による発問を繰り返し用いていると、子どもはそれに慣れ、ついには教師の発問を先取りし始めるということが起こるという例に、このことを見ることができる。子どもが自らの授業体験を通じて、授業理論をいわば「暗黙知」として学ぶことにより、子どもに変化が生ずることになるわけである。

さらにもうひとつの変化は、子どもが、「X理論」そのものに親しむことにより、あるいは、既に周知の「X理論」的見方に、その子ども向け解説書を読むなどして、親しむことにより子どもに起こる変化である。この変化は教師にとってX以前とは異なる状況をつくりだすことになる。X理論を知った子どもは、X理論に基づく教師の働きかけをX理論的見方で理解し、時には先取りしてそれに対応するということができるようになってしまう。これは、X以前、あるいは、X理論の普及と周知化以前には全くありえなかった事態なのである。

これと類似的な変化は、日常生活ではいくらでも起こっている。たとえば、教育における「ピグマリオン効果」（自己充足的予言の一例）の理論も、それを教師が知り、そして更に子ども達が知り、それぞれがそのことを意識するようになった時、その効果は、それ以前に比べて、著しく異なってくるであろう。

またたとえば、身近におきた一つのエピソード。小学生の子どもが『子どものしつけ方』なる本を見付けて読んだ。そして、「なーんだ、お母さんはこれまでこんな風に考えて私をしつけようとしていたのか！」と言った。親がその本を読む前と後だけでなく、子どもが読む前と後でも、親子の関係の状況には、親のしつけの持つ意味と効果に関して、変化が生じていると言ってよいだろう。

またたとえば、精神科医が精神医学および理論について全く無知な患者の治療に当たる場合と、専門的知識を有する精神科医を患者として迎えてその治療に当たる場合とでは、著

しく異なる状況となる。なぜなら、後者の場合、診断・治療について、担当医師がなにを考えているかを、患者が時には察知してしまい、そのことが治療過程に変化をもたらすし、医師はその変化を考慮に入れて治療に当たらなければならなくなるからである。

また、手品や奇術でも、観客にその種（タネ）を知らせないことが、驚かすためには必要なのである。

更にまた、戦争において、実践的に有力な戦術・戦略理論を、対戦する双方が知らない状況、一方のみが知っている状況、そして双方が知っている状況、それぞれにおいてその特定の理論の実践性は著しく異なるであろう。

同様の構造は、後に触れる、武道における秘伝、芸道における秘伝にも見られる。こうして、X理論の無制限の公開、広範な普及と周知化は、X理論の実践性の完全性を崩壊させて行く、といえるのではないか？　とすれば、逆に、X理論の公開・普及を制限することで、理論の実証性と実践性の完全性を保持する可能性も考えるべきではないか？

ここで、しばらく、X理論の公開・普及を制限すること、つまり、X理論を「秘伝化」すること、そしてその意味を考えてみることとしよう。

四　理論の「秘伝化」の意味

現代は、社会のあらゆる所で、総ての情報の公開、公共化が求められ、総ての人々が総てを知る権利を主張し、またその権利が尊重されてもいる時代である。従って、秘密が守られにくい時代であると言ってもよいであろう。そこでは、総ての知が公開され、自由に流通し、普及することが、「善」であるとの前提がいつの間にか自明のこととして広く受け入れられているように思われる。しかし、この前提の自明性を検討なしにそのまま受け入れて良いものかどうか。

授業理論を秘密にするとか、秘伝化するとかいうことは、普通は考えられていない。また、そのようなことをもし真面目に提案したとしたら、「この情報化の時代に何を言うか」と一笑に付されてしまうことであろう。しかし、そのような時代であればこそ、授業理論の公開・流通・普及を制限し、理論を秘密にし、秘伝化する可能性と、そのことのもつ意味を、少なくとも一度は検討しておく価値があると考えるのである。

「秘伝」とは「秘密にしてたやすく人に伝えないこと。また、そのもの。奥義」あるいは「秘密にして特定の人だけに伝授する奥義」と、ある国語辞典の説明にある。

ここでは「秘伝」とすること――「秘伝化」――のもつ意味について検討するに当たって、その事例として、『兵法家伝書』、『五輪書』、『風姿花伝』（花伝書）などを念頭におきつつ、考察を進めることとしよう。

以下の考察では、その秘伝を知ることが、その道の実践において、格段の差異を生むこと、つまりその秘伝が実践的であることを仮定しよう。非実践的な――つまり実効を持たない、無力な――秘伝でも、秘伝化しておくことはそれなりの意味を生ずるが、ここでは、そうした場合の意味について論ずることは措くことにする。

さてある実践的な理論を秘伝としておくことには、少なくとも次のような積極的な意味を考えることができよう。

まず第一に、実践的な意味。秘伝としておくことにより、理論の実践性を保持できること。逆にいえば、秘伝としないと、理論の実践性が失われることがありうること。

たとえば、もし剣術において、自分の流派の秘伝を公開し、総て他流派の剣士に知られたとすると、他流派の剣士も同じ術を学ぶことができ、自流派の剣士の相対的な強さは低下することになる。

また、たとえ、他流派の剣士が同じ術をその「秘伝」から学ぶのでないとしても、秘伝が既知となれば、自流派の剣士の術に対抗する術が、他流派で編み出され、「裏をかかれる」可能性が出てきて、秘伝の実践性――効力――が減ずることになる。その危険を防ぐためにも、秘伝としておく必要がある。

さらにまた、「秘伝」が総ての人びとに知られてしまうと、それに基づく実践そのものの効力が減じてしまうという場合もある。『風姿花伝書』（岩波文庫、一〇三頁）にこうある。

「秘する花を知る事。秘すれば花なり。秘せずば花なるべからず、となり。この分け目を知る事、肝要の花なり。そもそも、一切の事、諸道芸において、その家々に秘事と申すは、秘するによりて大用あるが故なり。しかれば、秘事といふことを顕はせば、させる事にてもなきものなり。これをさせる事（にて）もなしと云ふ人は、未だ、秘事と云ふ事の大用を知らぬが故なり。」

つまり、さほどたいした事柄でなくとも秘する事自体が重大な効用を持つというのである。「秘すれば花、秘せずば花なるべからず。」とする立場では、秘することなしに花はないと言うことになる。

授業理論についても、その公開がそれに基づく実践の効果を失わせる可能性があるとき、その実践性を維持するために、「秘伝化」することの積極的意味は存在するといえよう。

つぎに、第二に、教育的な意味。理論を秘伝化すると、その伝授者は、(a)「だれがそれを学ぶか――だれにそれを伝えるか」、(b)「いつそれを学ぶか――いつ伝えるか」、(c)「何のためにそれを学ぶか――伝えるか」、を限定し、制限し、

調節することができる。逆に、公開されていると、そのような限定、制限、調節は極めて困難である。

たとえば、剣術において、もし、秘伝が「おおらかに」あるいは「みだりに」公開されていたとしたら、その精神的伝統を継承するのにふさわしくない人物が秘伝を小手先の技術として盗み、「邪険」を生む危険が増大したことであろう。秘伝化されていたからこそ、それを学ぶにふさわしい人物を見定めて、限定して伝授することが可能だったのである。

また、公開されていれば、秘伝の意味・価値を分かることのできない早すぎる時期に、秘伝をことばで学び知ることによって、浅い知識としてのみ覚えてしまい、それで分かったつもりになり、結果として、進歩が妨げられたり、止まったりする可能性が生ずる。秘伝化は、伝授者が、教育効果を最大にすべく、伝授に最もふさわしい時期を選ぶことを可能にする。剣術の秘伝は、初心者には伝授しなかった。実践力においてある段階に到達し、秘伝の意味と価値を分かることのできるようになった者に限定して、「免許皆伝」として、伝授されたのである。

また、公開されていると、初心者は、その意味も価値も分からず、表面的にしか理解できないままに、本人はすっかり理解したつもりになる結果、修業の道の奥行きを浅いものと錯覚し、その道を真剣に追究する動機づけを失ってしまうことも起こりうる。道を奥行きのあるものとして体験させるのは、進むたびに新しい地平が開かれ、そして、進むことで更に新しい地平が開かれてくるとの期待が持続することである。もし、歩み始める前に、道の終着点を総て見てしまったと考えても、なおその道を真剣に追究しつづける情熱を失わないでいることが果たしてできようか。

授業理論についても、その周知化が教師教育において、教師の修業の道において、以上述べてきた意味に通じるいずれかの意味で、実践の質の向上の妨げとなるなら、その「秘伝化」には積極的意味が存在すると言えよう。

次ぎに、第三に、社会的な意味。秘伝はそれを共有する人々の——特権的な——立場・地位・利益を守るという意味も当然ある。これは、伝統的な家あるいは流派において生き続けているばかりでなく、現代社会においても、医師・弁護士などの専門職の職業的利益が「免許状」により守られているという点にも一部生きている、と考えることもできる。しかし、教師の専門性が、授業理論の秘伝化により果たして守れるかどうか？　また、そのようにして守るべきかどうか？

さて、秘伝化に以上のような意味があるとすれば、X理論は秘伝化すべきであろうか？

現代社会においては、文字通りの「秘伝化」ではなく、実質的、機能的に、一時的な「秘伝化」が起こる場合がある。

すなわち、習得困難な知識が限られた人々によって習得される場合、結果的に、秘伝の伝授に近い状況が生ずる。逆説的には、現代における秘伝化は理論を習得困難にすることでも達成できる、といえる。しかし、——知識としての「X理論」を含む——総ての知識の習得を容易にするはずの「X理論」は、それ自身の特質により、現代における意味の「秘伝化」さえも崩壊させる働きを持つ、ともいえよう。

そこで、たとえ、秘伝化に積極的な意味がありうるとしても、情報の公開を至上の価値とする現代の「情報化社会」においては、いかなる授業理論にせよ、秘伝化し、それをいつまでも秘伝として維持し続けることは現実には極めて困難なことであろう。とすると、授業理論形成の道は、形成された理論の公開・普及を前提として構想されなければならないことになる。ということは、これまでの議論からすれば、実証性と実践性を兼備した、授業の完全理論は不可能だということになりはしないか。

「いや」、またしても、X理論の弁護者は更に言うであろう。そのように、公開と普及により完全性を喪失する理論もたしかにあるかもしれないが、しかし、総ての理論が常にそうであるわけではあるまい、と。理論の周知化がその実践性を減少させる場合も確かにあるが、むしろ、それを増大させる場合もあるのだ、と。そして、X理論は周知化が実践性を増大させる特質を持つので、秘伝化の必要はない、と。では、この差異を生む理論の特質はなにか。

たとえば、教師が子どもを支配・管理・統制するための理論ではどうか。教師が子どもを理解し、解放するための理論ではどうか。教師と子どもが対立関係にある時と、協力関係にある時とではどうか。「秘すれば花なり」に学べば、子どもに新鮮な驚きを体験させるための理論ではどうか。

また、授業の完全理論が完成したとされた途端、その理論は授業実践の質をむしろある段階に止めてしまう働きをもち始めるということになりはしないか。ここでは、これらのいずれをも、今後の問題としてのみ提起しておくことにしよう。

ここで、筆者は、授業の完全理論は不可能であると、敢えて断定しておこう。そして、この断定が、いつの日か授業の完全理論の完成によって否定されることを待ち望みたい。

五　授業の完全理論の不可能性の意味

授業の完全理論が不可能であるということは、いかなる意味をもつか？

授業実践者も、授業理論研究者も、それぞれが生きている時代・社会・文化の制約を受けている歴史的存在である。そのことが授業の完全理論の不可能性の根底にある。それを超えることを試みることはできても、それを達成することは不

可能なのであろう。そのような制約のもとに生きる人間としては、以下のように考えざるを得ないのではないか。

「実践的・実証的な教師は、苦しみ骨折って実践し、その実践のなかから、実践を背景とした自分の理論を生みだし、その理論の支え、理論の武装によって、自分の実践を前方へ押し進めなければならない……。理論のめざすところへみずからの実践が行きついたとき、まえの理論は消滅し、新しい実践のなかからまた新しい理論が生まれてくる。こういうことをくりかえして、次から次へと実践が生まれ理論が生まれていくのがほんとうの実践家の態度であり、実践から学ぶものの態度である。」（斎藤喜博『授業以前』斎藤喜博全集第三巻、九六頁）

授業理論は歴史的存在である。授業理論創造の道も、授業実践創造の道と同様に、その地平が無限に開かれている限りのない道なのである。授業の完全理論完成の夢は、やはり一つの夢であったようだ。